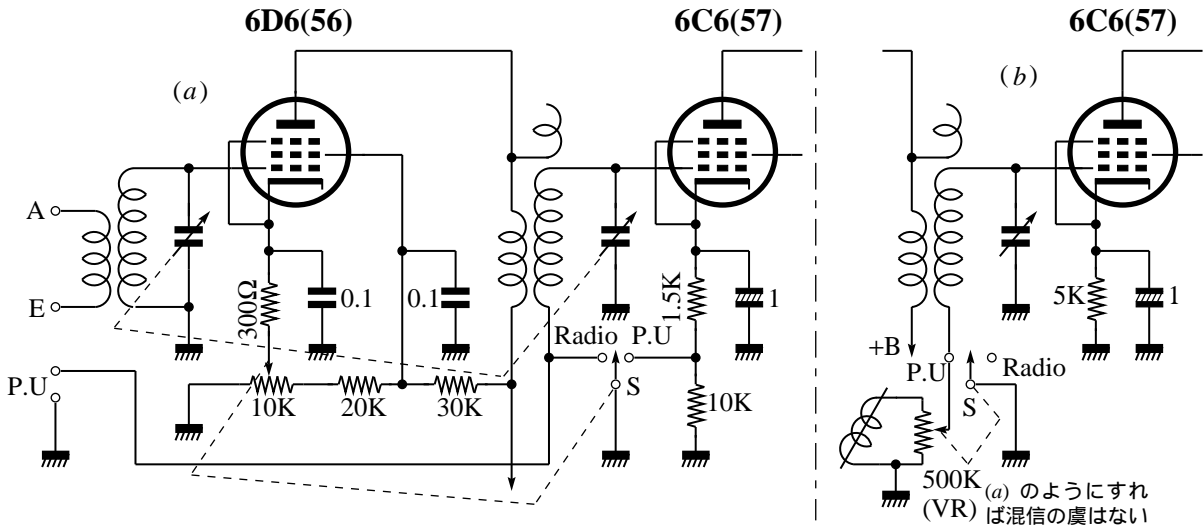


## ラジオとピックアップの切替

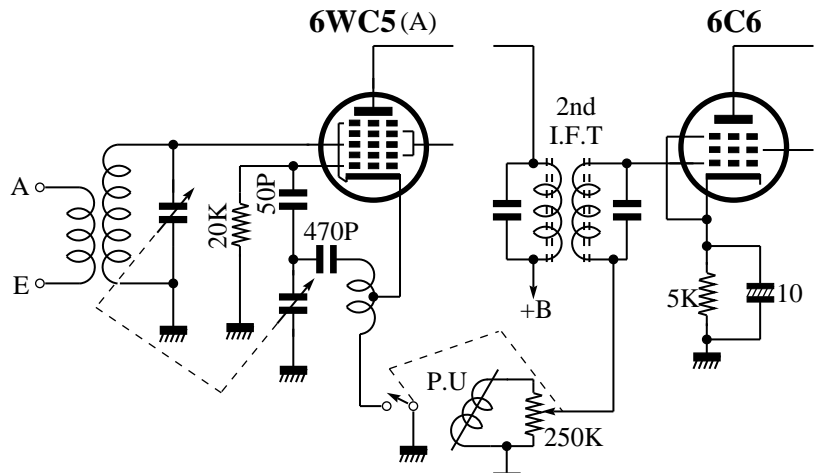


第 1 図

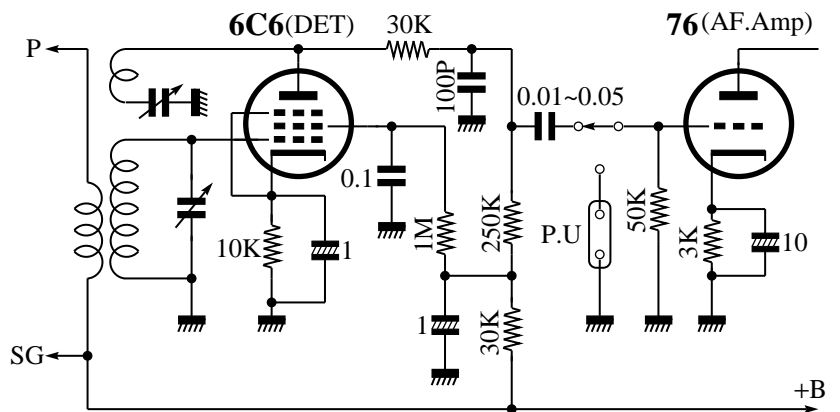
レコード演奏中にラジオが混入するものがあります。名曲鑑賞とオツにスマシタ心中、おだやかならぬものを感じるのは誰しも。では「どうしたら名曲を」堪能し得るようスイッチを設けるか.....色々並べて見ますが中にアヤシゲなものも現れるか知れず実験の参考程度に御覧下さい。

第 1 図は高一、高二級の最も簡単なセットに相当と思われます。(a) は RF 段のバリオーム 10K を右にシボリ切ったとき S は P.U. に接がれバイアス( 検波管 ) を変えて  $\mu$  を下げています。なぜなら  $E_p - I_g$  特性の下部湾曲部において検波しバイアスを下げた直線部分では入力に応じた増幅波型を得るためであります。もしバイアスを下げないとき AF 入力がかわれれば出力波型は歪んで検波特性を悪くします。したがって余程の大電力がアンテナに誘起されない限りラジオの混入は心配ありません。(b) はバイアスを変えず単に P.U. 回路のボリュームがショートされるか否かで各々目的を達しています。このボリュームを (a) と同様に使用したらよいのではないかと考えます。

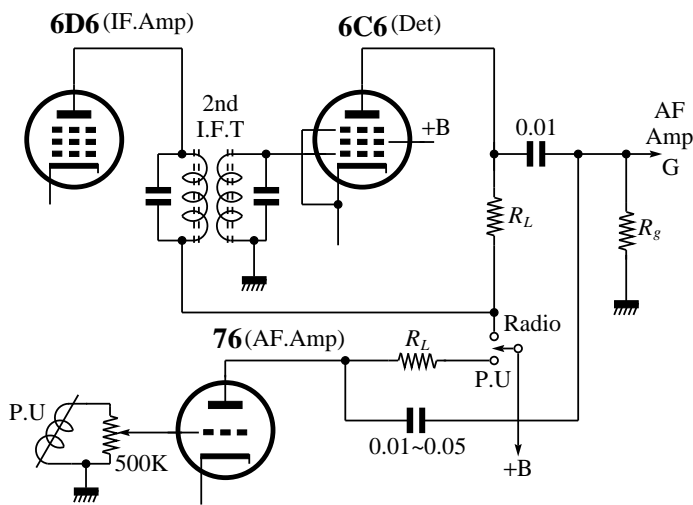
第 2 図はビクターで用いられている方法でコンバータのカソードを切ってレコード演奏するようになっています。受信機を働せる場合、ピックアップのボリュームがショートされ(つまり IFT がアースされたとき)カソードが接がれコンバータは動作を始める。この他オールウェーブでは IF 段のカソードを切るようにしてあります。



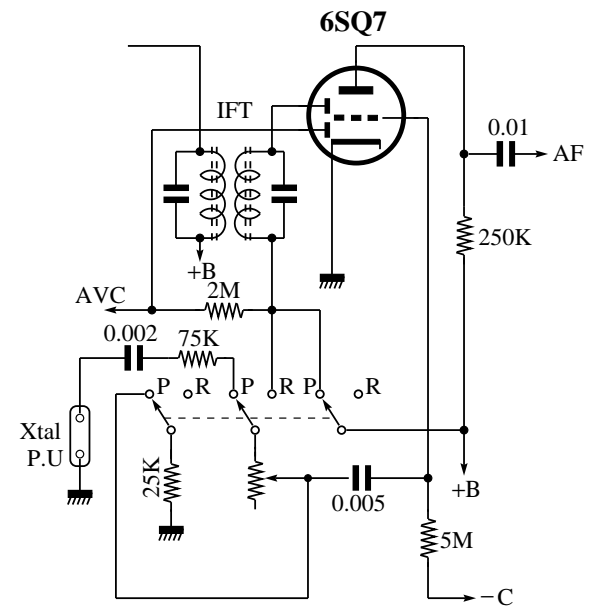
第 2 図



第 3 図



第 4 図



第 5 図

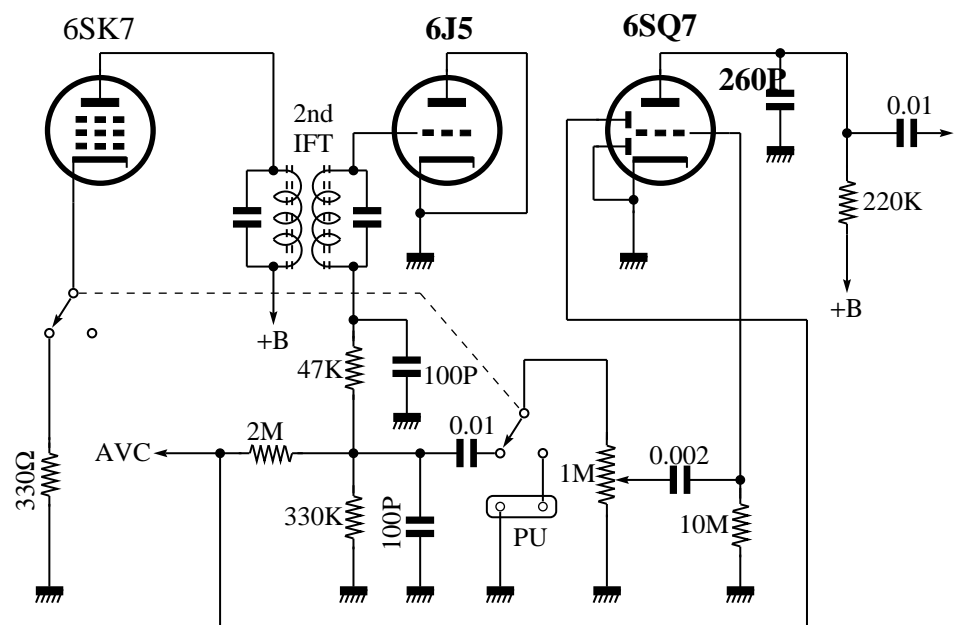
第 3 図は検波管と AF 増幅管を各専用とするものでラジオ混入絶無と強調し難い。出来れば同時にラジオ部の B 回路を切るべきであります。

第 4 図は P.U. 専用増幅管を設け B 回路のみ接断し目的を達している簡単で確実な切替法ではあるが真空管 1 本損したような気が致します。

第 5 図は「新しい回路・珍しい回路」より抜萃したもので P.U. の時 B 電圧を整流 2 極へ、R を通じて AVC 2 極管に与える。検波電圧をショートすると同時に R を通してあるからここに大部分の電圧降下を生じ AVC 電圧が変換管、IF 増幅管に大きく加わるためこれらの増幅度を大きく減少しラジオは絶対聞こえないようにしてあります。

第 6 図はスチワート・ワナーの 207A に採用されている方法で 6J5 を 2 極検波として 6SQ7 のダイオードで、6J5 の AVC 電圧を整流している。P.U. 切替は 6SK7 のカソードを同時に切ってラジオ混入の絶対ないようにしたものであります。

以上の外、不二屋電機(元をタダセバ御菓子司)では、ピックアップのスタンドに押ボタン式のスイッチを設けてピックアップのアームをスタンドに置いたとき IFT(2nd) を接ぎ P.U. をショートしているのもある。



第 6 図

## PDF 化にあたって

本 PDF は、

『無線と実験』1949年3月号

を元に作成したものである。

PDF 化にあたって、旧漢字は新漢字に、仮名遣いは新仮名遣いに変更した。漢字の一部には振り仮名をつけた。

ラジオ関係の古典的な書籍及び雑誌のいくつかを

ラジオ温故知新(<http://fomalhaut.web.infoseek.co.jp/index.html>)

に、

ラジオの回路図を

ラジオ回路図博物館 (<http://fomalhaut.web.infoseek.co.jp/radio/radio-circuit.html>)

に収録してある。参考にしてほしい。